
ゲート

雨合羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゲート

【Nコード】

N8998A

【作者名】

雨合羽

【あらすじ】

ビルの屋上でたむろする4人の男。その会話からでる「街消滅」の言葉。4人の男の狙いは正体は何なのか・・・

プロローグ

8階建てビルの屋上。涼しい風が頬に当たる。

僕はいずれ消え行くこの街を眺める。

「いつまでそうやってんだよ、早く行こうぜ」

僕の後ろに立つローブ姿の男。

頭は両目だけ包帯で隠している。

歯は鋭く、尖っている。自分の舌も傷つけるのではないか。

わがままな少年のようなしゃべり方。性格もその通りなのだが。

「まあそう焦るな。こいつにも生まれ育ったこの街に何も感じないわけが無い」

左に座る男が静かに、いなすように包帯の男を宥める。

この男もローブだが、頭まですっぽりと被っている。

顔は見えない。ただローブの中に光る二つの目だけが彼の存在を示している。

「ふむ」

ただその様子を見ているだけの男、僕の右側だ。

この男もローブだが、両腕がむき出しになっている。

筋肉質な腕には数々の傷跡が残っている。

左側の男が口を開く。

「どうだ、故郷を自分の手で消滅させる気持ちは、どうおも・・・」

「無いよ」

僕は無感情に言い放った。

「何も感じない」

後ろの男がにやつく。

「無感情な奴。まあそういうのが俺達の仕事に必要なだからな」

「行こう、リュウゼン、サイカン、キザル」

僕の周りの男は立ち上がる。

「仕事開始か！」

包帯の男が勢い良く地面を蹴る。

僕達もそれにならう。

重力を逆らって、人体を超えて、僕達は大空へ跳び立つ。

月明かりに照らされる4人の影は美しくもあり、おぞましくもあった。

僕はこの故郷の崩壊とともに人間ではなくなる。

それは悲しいことではない。

新しい世界への旅立ち。

プロローグ（後書き）

初めまして。初投稿です。

まだまだこのサイトのシステムを理解し切れてない部分もあると思います。

そして小説もまだまだ未熟でまるでゆでるのに失敗して温泉卵みたいになったゆで卵みたいな小説かもしれませんOTZ
温かく見守ってやってください。

プロローグは謎っぽく書いてみました。（そうしないといけません
がw

わざと誰が誰なのか、名前は確定させてません。

それは、何処までも謎を作って行きたいという作者のものすごい精神の所為です^^;

これからどんどん迫力を出していく・・・つもりです・・・多分・・・

・OTZ

一 前触れ No. 1

開け放たれたカーテンの間から日の光が差し込む。

そのまま俺の顔に降り注ぎ、朝を知らせる。

不機嫌な朝。そう言った方がいい。

いつもはカーテンを閉めている。日の光がまぶしいから。

だが今回は閉め忘れた。

俺は手のひらで光を遮る。

耳元で規則的なピピツという音が響く。

日の光とデジタル時計によって完全に眠りから引きずり出された俺はまぶたを擦りながら部屋を出る。

リビングに降りる途中、階段を踏み外した。

椅子に座ると足首が痛み出してくる。

キッチンから母が顔を出す。

「さっき凄い音がしたけど、大丈夫？」

「この状態を平気と言うのか？」

それを聞いて母は大丈夫。と言ってまたキッチンに消える。

テレビの電源をつける。

このテレビは何年使っているのだろう、普通に動いてるのが不思議なくらいだ。

丁度ニュース番組だった。

「・・・というてんの解決が出来ていないため、捜査は難航しています」

画面には平原に出来た大きなクレーターのようなものが映っている。

綺麗な円形。周りに何も飛散していない。

ただぽっかりと開いた穴。

俺は焼きたてのパンを頬張る。

「目撃者の証言によると・・・」食器を洗う音がうるさい。「突然、

3, 4人のローブを着た・・・」音量を上げる。「前触れも無く空間が消滅したと証言しています。以上、現場からでした」

画面が変わり、60くらいの老人がコメントを述べている。

内容は普通の解説で、何故かテロの話にそれかけている。

俺は興味をなくしてテレビを消し、着替えを始める。

鞆を引っつき、遅刻の20分前を目前にして学校へ走る。普通の高校ライフだ。

一 前触れ No, 1 (後書き)

うーん……

どうもしつくりこない…………OTZ

コメント頂きました^^

送ってくれた方、感謝です。

参考にします(自分の技量が足りるかどうか……W何せ0, 5W
のエネルギーですからね……OTZ
安い電子レンジにも満たない自分の力量……はあ……OTZ

今回は何事も無く、平坦な展開でした。

ただ起伏のある展開を描けなかった自分のミスです……はいOTZ
一応ファンタジー系に……と思っているのですが、自然体で持っ
ていけるか心配です(既に不自然ですし。

とにかく頑張ります^^;

前触れ No. 2

からっと晴れた空。

そよ風が吹く校庭にアブラゼミの泣き声が響く。

私は教室の窓から外の景色を眺める。

授業の間の休憩時間、一番暇な時。

そのため私はこうして暇をつぶそうと試みる。

しかし長くは続かず、結局好きでもない本を読み始める。

「ねえ美由っ」

不意に美由、私の名前が呼ばれる。

「うん？」

顔を上げると雑誌を持って立っている友達の姿があった。

いかにも何か話題があるという顔。

「これ、見た？このページの・・・ここ！」

あまりにも断片的で分かりにくい案内を頼りに話題の記事を見つける。

写真には大きく開いたクレーターのようなものが映っている。

最初の文は分かりにくいので省いた。

【・・・この事件の発生時刻は昨日の午後8時24分と推定される。

「前触れも無く突然クレーターが現れた。」という目撃情報が寄せられている。

他にも事件発生直前、ローブを被った4人の集団が目撃されるなど、事件に結びつく情報も集まっており、警察はこの4人の行方を追っている。・・・】

「ふうん」

特に感想は無かった。

この近くで起こったとは思えないし、何か変化が起こるわけでもない。

「それで・・・これ、何処で起きたと思う？」

「何処？」

一応聞いてみる。

「この学校の近くの丘！」

以外だった。

こんな近くで起きていたとは。

「それで・・・美由」

「え？」

「放課後、行ってみよう？」

別に断るつもりは無かった。

近くであるとなると、さすがに興味がわいてくる。

「いいよ。他也来る？」

学校が終わってからの暇つぶしが出来た。

私は少しうずうずしながら授業を終えた。

前触れ No. 2 (後書き)

• どんどん視点が変わるので分かりにくくなるんじゃないかと心配・

その予想が的中してると思いますが^^;

もうすぐスッキリすると・・・思います・・・多分・・・はい・・・

OTZ

今回もあまり展開無し・・・

絶対飽きられてる・・・と思いながらも書いてしまう自分OTZ

今度こそ展開を・・・!!!!

前触れ No. 3

何事も無く学校が終わり、家に帰ろうと歩き出した瞬間、誰かに呼び止められる。

「おい、海斗!」

振り返ると同級生が興奮した顔で走ってくる。

正直、気持ち悪かった。

「何だよ、き……」

『キモいな……』と言おうとしたが止めた。

「今から、みんなで見に行くんだけど、お前も行く?」

大体察しは付いた。

授業中、クラスの噂好きな奴等が話していた。

この近くでクレーター事件があったとは……

「え……面倒臭い」

「こないつもりか? じゃあお前が学校の窓割ったこと校長に話すぞ? ん? ん?」

それだけのご勘弁だった。

俺が割ったガラスはかなりでかい。そして高い。

出来れば知られたくない。

「わかった。分かったから絶対言うな」

「何か、焦げ臭いな」

同級生が鼻を押さえながら言う。

クレーターに近付くにつれ、焦げくさい匂いが強くなってきた。

既に野次馬が増えていくらしく、車や自転車がそこら中にとめてあった。

人込みが見えてくる。

「お、あそこだ!」

同級生が走り出す。

俺は普通に歩く。

人込みを掻き分けながら、見えるところに移動する。

「うわぁ・・・」

思わず声が漏れた。

テレビで見た時よりも遥かに大きかった。

「でかいなぁ・・・」

同級生が口をぽっかりあけながら感嘆の声を漏らす。

——ピシィッ

何かに亀裂が入ったような音がする。

「おい、何か聞こえなかったか？」

俺は同級生に返答を求める。

「え？何が？」

——ピシィッ

「いや、だから・・・」——ピシィッ

また音が聞こえた。

——ビキッ

音が変わった。

——ビキビキッ

——バシィッ

「うわぁ！！？」

突如野次馬が何かに吹き飛ばされる。

当然、俺も同じ目に遭う。

尻餅をついて何が起こったか理解しようとする。

「空間裂傷が終わった」

後ろで声がする。

「次は、ゲートを開くぞ」

後ろを見るとローブを着た男が2人、立っていた。

前触れ No. 3 (後書き)

最後部分が4人の男になっていたのて（4人いられると矛盾が出るので）2人に修正しました^^；

前触れ No. 4

「ほらっ！早く！」

私の手を友達が無理矢理引っ張る。

クレーターが見えてくる。

「ちょっと・・・痛い！」

必死に拒否しても友達は興奮してるのかどんどん進んでいく。

やっと着いた時には私の袖はしわが寄っていた。

しわを伸ばしてからクレーターを眺める。

さすがにでかい。

直径300メートルはあるだろうか。

しかし、でかいだけではなかった。

何か変わった空気。

ずっしりと重くのしかかるような空気。

「ねえ、何か変じゃない？」

私が友達に聞くと

「え？あー、ちょっと焦げ臭いかな？」

「そういうことじゃなくて！」

——ピシッ

「え？何？」

「美由？何か言った？」

「さっきの音・・・」

「え？」

——ピシッ

「ほら！この音！」

「美由、聞こえないよ？」

——ピシッ

「さっきから聞こえてるって！」

「ねえ、あんたおかしいよ？」

「いや・・・だから——ビキッ・・・え？」

——バシィッ！！

「きゃっ!？」

私の体が後ろに吹き飛ばされる。

私だけじゃない、クレーターの周りの人が全て。

まるで突風が吹いたように。

周りの木が軋む。

——ザッザッザッ。

後ろから足音が聞こえる。

振り向くとローブを着た男が2人、クレーターを見ていた。

一人は目を包帯で隠し、もう一人は頭まで被ってはいるが、顔は見えている。

「空間裂傷、おわりっ」と

「次は・・・ゲートだね」

「お前、この仕事初めてだったよな？出来るか？」

「キザル、君は今まで一回だけだろ？あまり変わらないじゃないか」

「うるせえな。まあいいや。準備はいいか？」

「僕はいつでもいけるよ」

私はただボーっとそれを眺めていた。

数秒して複数の声が響く。

『ヴァニシア!』

次の瞬間、クレーターの真上に円が現れた。

前触れ No. 4 (後書き)

えーと、あれです。大失敗です。

一塊は終わりました。

が。

展開が強引過ぎる・・・OTZ

どうやったら自然体でいけるんだろう・・・

誰か知恵を伝授してくださいさ(蹴

一応次からは客観的な文章になります。

また分かりにくくなるのかな・・・OTZ

二 唐突な旅立ち No, 1

クレーターの上に突然現れた円。

普通の空間と円の中の空間を隔てる枠は、銀ともいえるし灰色ともいえる。

円の中の空間は空が映ってはいたがその景色はゆがみ、ねじれ、もつれ合っていた。

「・・・何だこれ？」

海斗は誰も最初に言うであろう疑問を口にした。

「次の段階、と行くか」

ローブの男が手を円に突き出す。

『グラビド！』

再び複数の声が響く。

それを合図にしたかのように円が変化を始める。

円内の景色が黒く、暗く変わっていく。

そして段々と黒一色になる。

変化が終了した瞬間、円内から何かが飛び出してきた。

黒い霞の様な物。

それが霧のように立ち込める。

「何？・・・うつ・・・ゴホッ・・・」

その霧は煙のようににのどを刺激する。

思わず美由は咳き込む。

回りも暗くなってくる。

10メートル先がやっと見えるくらいだ。

そして異変は起こった。

「ぐぎゃあああつ・・・」

野次馬の一人が悶え始める。

そして体が黒くなっていく。

次の瞬間、黒の液体となって飛び散る。

異変は人間だけではなかった。

周りの木が、鳥が、地面が。

見る見るうちに黒くなる。

海斗にも異変は起きる。

「うっ・・・あ・・・」

呼吸が止まりかけ、体が震える。

まるで太い針で心臓を射抜かれているような激痛。

またも後ろで声がする。

「最終段階だ」

苦しみながらも振り向くと、ローブの男は突き出した腕をゆっくり降ろしていた。

胸の位置まで持ってくると、掌を開き、瞬時に握る。

すると円が回りだし、周りのものを吸い込み始める。

生き残っていた人間は瞬時に黒い液体と化し、吸い込まれていく。

「あ・・・うあああああああ！！！！」

海斗の体が黒く変わっていく。

（こんなところで・・・死にたくない！！）

そう思っても体は段々と黒くなっていく。

完全に真っ黒になった瞬間、海斗の体は液体となって飛び散る。

はずだった。

突然海斗の体が元の色に戻り始める。

それと同時に円が小さくなっていく。

黒い霧は薄くなっていき、周りが見えてくる。

完全に円が消え、霧が晴れる。

其処に見たのは完全に街とは思えないものだった。

あたり一面荒野、といった方が正しい。

とにかく何も無かった。

残っているのはローブの男と自分。

そして少し先に蹲っている少女が一人。

海斗には誰だかわからなかった。

「驚いたな。消えない奴もいるとは
後ろから首をつかまれる。」

「だが、生き残ることは出来ん。」

二 唐突な旅立ち No. 1 (後書き)

新展開、って言うのかな？ ^^；
とにかく新展開です。

そして「唐突な旅立ち」ならぬ「唐突な客観的文章」OTZ
いきなりだったから分かり難いかもしれません ^^；
ですが、コツコツと頑張っています ^^；

唐突な旅立ち No. 2

後ろからギシミシツと何かが軋む音が聞こえる。

海斗は振り向こうとするが首をつかまれていて動かすことが出来ない。

ヒュツと風を切る音が聞こえる。

その後にカツと何かが突き刺さる音。

「・・・貴様・・・」

声からして、驚いているようだ。

首を掴んでいた手が離れる。

「う・・・うわっ！」

反射的に逃げ出す。

二人のローブの男は止まったまま、追おうとしなかった。次に後ろを向く。

「え？」

二人の男は消えていた。

影も形も無かった。

「いつまで其処を見ている？」

また後ろから声がある。

振り向くとローブの男がいた。

「っ!？」

フードの中から尖った何かが飛び出してくる。

一直線に海斗を狙う。

海斗は横に飛びのき、間一髪でよける。

「外したか」

男はフードを取る。

その下からは異形の物が姿を現した。

鼻から上は普通の人間。

鼻から下は昆虫のような口がむき出しになっている。

首周りからはカマキリのような腕が二本、出ている。

「・・・この姿は見たくなかったが、致し方ない」

「あ・・・あ・・・」

海斗は驚きのあまり、声が出なかった。

腕が伸びる。

海斗の首を捕らえる。

避け切れない。

（死ぬ・・・！？）

またもやカツと何かに突き刺さる音が聞こえる。

「・・・小賢しいっ!!」

海斗は鎌が刺さったはずの首を見る。

あと5センチの所で何かの力によって不自然に止められている。

「う・・・はあ・・・はあ・・・」

まだ痛みが残る体を起こし、美由は周りの状況を見ようとする。

最初に目に入ったのはローブの男。

美由を驚いたように見ている。

「消えてねえのかよ・・・」

「驚いたね」

美由は逃げ出そうとしたが体が痛みで動かない。

そうしている内に包帯の男が近付いてくる。

「めんどくせえ・・・殺すか」

手を伸ばしてくる。

あと少しで手が触れる。

「キザルは殺らなくていいよ」

「あ？」

「僕が殺る」

後ろの男が美由を睨む。

「・・・っ！」

息が詰まるほどの殺気が押し寄せる。

次の瞬間、景色が揺れた。

体が宙に浮かぶ。いや、持ち上げられた。

首にめり込む手。

呼吸を止められる。

「は……あ……」

「スパッと殺っちまえばいいのによ。楽に逝けるのに」

「これが僕の殺し方。分かるだろ？この苦痛に悶える表情、絶望感。全てが楽しい」

手に力が込められる。

「か……は……」

「お譲ちゃん、不幸だったな、俺がとどめさしてりゃ楽に死ねたのによ」

キザルと呼ばれた男が呆れたように言う。

「死ぬのに幸も不幸もあるのかい？」

「……お前とは話があわねえ」

「残念」

美由の体が地面に叩き落される。

「う……はあ……はあ……」

「そろそろ、終わり」

男の手から炎が滲み出て来る。

「最初からそうすればいいんじゃないか」

「人が苦痛に悶える表情が、僕は好きなのさ」

「気持ち悪いな」

「うるさいな」

男は手を美由にかざす。

すると炎は勢い良く振りかかって来る。

唐突な旅立ち No. 2 (後書き)

最後は奴のものすごい残酷な性格を現すため、何か怖い感じになっちゃいました^^;

文のまとまりに欠けていたのが反省点OTZ

唐突な旅立ち No. 3

自分の体を包む炎。

美由は思わず目を瞑る。

——死なせない。

頭の中に声が響く。

「え？」

次の瞬間、体を包んでいたはずの炎が消え去った。

「な・・・！？」

キザルが目丸くする。

「サムシール、お前・・・何で魔法を止めた・・・？」

サムシールと呼ばれた男が首を振る。

「止めたんじゃない。止められた。分かるだろ？その違い」

「・・・まあいいや」

「もうさっさと殺った方がいいね」

サムシールが再び炎を出す。

また美由の体を炎が包む。

——無駄。

またしても炎がかき消される。

「僕、魔法間違えた？」

「いや、あってるぜ」

美由も何が起こったか分からなかった。

「ふむ・・・」

さっきからだ見てるだけだった男が前に出る。

むき出しになっている腕は筋肉以外何も付いていないのではないかと疑うほどだ。

「リュウゼン、俺がやる」

「サイカン、お前に出来るのか？」

「力でねじ伏せる」

「お前らしい考えだ」

リュウゼンと呼ばれた男は鎌のような腕を引っ込め、後ろに下がる。

サイカンと呼ばれた男が近付いてくる。

「粉碎、完璧で最善な殺し方だ」

そう言うのとフックのように横から殴りつけてくる。

海斗はよけようと思ったが間に合わない。

頭蓋骨が碎ける。

そう思った瞬間、再び何かによって妨げられる。

「むっ!？」

またしても数センチの所で止められる。

「サイカン、もうやめだ。きりが無い」

「見逃すのか？」

「そうは言っていない。ゲートを使うぞ」

「・・・わかった」

「しつこい・・・」

サムシールは何回も炎を出現させ、美由に振り落とす。だが何度やってもかき消される。

「・・・サムシール、ゲートの準備だ」

キザルが手をかざす。

「リュウゼンたちもギブアップかい？」

「そうらしいな」

「準備動作はいらないよな？」

「一気に吸い込もう」

サムシールも手をかざす。

そして声が重なる。

『ゲート!』

唐突な旅立ち No. 4

再び空中に円が現れる。

一気に回り始める。

海斗は頬に風を感じた。

風が段々と強くなる。

その風は円の中に向いている。

次第に海斗の体が円に近付いていく。

「これで一件落着だな」

リュウゼンが口元に笑みを浮かべる。

海斗の体は宙に浮き、円へと吸い込まれていく。

「う・わ・わ・わ・！？」

海斗は完全に円に吸い込まれた。

「人間風情が・・・」

リュウゼンは眉間にしわを寄せた。

「同じエリアで二回もゲートを使うとは」

キザルが感心したように言う。

「危険区域と言われただけのことはあるね」

サムシールは美由が吸い込まれた円を見つめていた。

「何で魔法が効かなかったんだろう」

「わかんねえよ。もしかしたら神のご加護かもな、はは・・・」

其処まで続けるとキザルはハツとする。

「そうだった・・・」

「キザル？」

「いや、何でもない、何でも・・・」

「君らしくないな」

サムシールはつまらなそうに肩をすくめる。

「そういえば、時間遅れてるよ？これ以上遅れたらまた怒られる」

「ああ、そうだな」

「キザル、いきなり大人しいね。気持ち悪い」

「殺されてえか？」

「君が仲間を殺すとは思えない」

キザルは恨めしそうにサムシールを見る。

「そんな目で見ないでくれよ。もしかして僕に気がある？」

「そんなに殺されてえんなら、素直に言えよおおおお！！！！」

「止めておけ、少なくとも私が怒る」

「ふむ・・・」

「リュウゼン、サイカン・・・」

キザルは舌打ちしてサムシールから離れる。

「さっき掴みかかれた時、キザルの愛情が垣間見えたけど？」

「殺っ」

「止めないか。キザル、頭に血を上らせすぎだ。サムシール、言葉が過ぎるぞ」

リュウゼンが咎める。

「ふむ・・・それはいいが、早く出発しないか？」

サイカンがさりげなく提案する。

「そうだね、まあキザルが僕に愛情を抱いてることは分かったから」

「つつつつ！！！！」

「嘘だよ。切れやすいね」

「全く・・・お前達は・・・」

唐突な旅立ち No. 4 (後書き)

何か・・・ギャグ的要素が入った気がします・・・へへ；
サムシールは男ですよ、（念のため・・・）

全く持ってゲ・・・ではありません。

そうです、ただキザルがゲ・・・あぎゃああああ！！！！（偶然其
処に居合わせたキザルが作者の説明を聞き、殺意を持った所であと
がきを終了します。

唐突な旅立ち No. 5

足場が無く、天井も無い。

上下左右どの方向を見ているのか分からない。

ただふわふわと浮かんでいるようにも思える。

海斗はそんな空間でボーっとしていた。

(ここ、どこだろ・・・)

あの円に吸い込まれて、その後はこの理解不能な空間に放り出された。

周りは真っ暗。というよりは黒雲がたちこめているとも言える。

周りの黒が雲のように形を変え、蠢いている。

「どこだここはっ!!!」

考えもなしに叫ぶ。

その叫びは虚しく響くだけ。

奇妙にエコーしながら遠ざかっていく。

叫んだのが原因か自然な物か、近くの黒がぐるぐると回り始める。

その回転が止まると、変化が現れた。

回転した空間が黒というよりは赤黒い、乾いた血の様な色になる。

其処から光る二つの赤。

美由は暗闇の中、何をしたらいいのか分からなかった。

ただ辺りを見回しては移動しようと平泳ぎのように手を動かす。

そろそろ疲れてきて空間に身を任せた。

勝手に浮いている、という感覚は気持ち悪いものではあったが、逆に心地よいとも思える。

「どこだここはっ!!!」

微妙なエコーの掛かった叫び声。

美由は声の方向を確かめる。

確認しにくいのが、其処には誰かが浮いていた。

何故か其処へ行きたくなる。

寂しさからか、畏怖からか、とにかく一人になりたくなかった。体中を動かして動こうとする。

だが空を掴み、蹴るばかりで前に進まない。

突然、奇妙な感覚が走り抜ける。

黒い景色の中に、確実に存在する何か。

次の瞬間、向こうに浮かぶ人の前にその何かが姿を現す。

全体的にどす黒い赤。

輪郭はトカゲのような形。

目のあたりに光る赤い光。

ルビーのように真っ赤で、恐怖を感じさせる光。

その異形の生物は段々と全貌を明らかにしていく。

唐突な旅立ち No. 6

胴体は両目の視野では捉え切れないほど長く、この空間全体に伸びているのではないかと疑う。

それはトカゲというより竜といったほうが分かりやすい。

だが、伝説に出てきたりする派手ないでたちの竜とは程遠い、腐敗し、朽ちた竜だった。

胴体の殆どがずたずたになり、傷口からは骨が見える。

皮膚はただれ、悪臭がしてきそうな勢いだ。

その竜は「グググググ」と気味の悪い唸りを上げる。

突然、美由の体が何かに引き寄せられる。

海斗はその異形の怪物に恐れを憶え、逃げ出そうとする。

だが体はその場に浮かぶだけ。

竜の両の目が海斗を捕らえる。

(これって・・・まずい・・・?)

「ググググググ・・・カアアア・・・」

竜が口をあける。

口周りの皮膚は溶け始めていて、口を開くとそれが引き伸ばされ、糸を引く。

「う・・・わ・・・」

海斗が恐怖に身を強張らせていると、横から何かが近付いてきた。人、の形をしている。

「受け止めてっ!!」

ハッとして振り向き、しっかりと受け止める。

「あ、ありがとう」

「いや、いいよ」

海斗は初対面のこの少女に自己紹介などとは考え付かなかった。まず自分が直面しているこの場面。

これが一番の問題だった。

「これって・・・ピンチっていうのかな・・・？」

少女が恐る恐る聞く。

「簡単に言うかね。詳しく言えば死の境地に立たされてるってやつ？」

「ピンチと思ったほうが気が楽だったのに・・・」

「話してる暇は無い、まずこの場を乗り切ることを考えよう」

「時間も無いと思うけど？」

確かに少女の言うとおりだ。

敵を目前にして考え込むなど言語道断。

「じゃあ決めよう。神に祈るか、竜のディナーになるか」

「・・・今のうちに神に罪の告白でもしとくの？」

「天国で安らかに・・・ってしてもらえるかもな」

「その前に臭い胃袋で安らかにしないと」

「あれはごめんだぜ？見るからに腐ってるじゃ・・・」
「オオオオオオオオオ！！！」

話しすぎだと咎めるように竜は吼える。

「覚悟は出来たか？出来て無くてももう死ぬぞ？」

「・・・出来てない・・・」

竜は口を大きく開け、二人を飲み込もうとする。

「まだ少し時間はあるから自己紹介、俺は海斗」

「あたしは美由。あの世でゆっくり話しましょ」

驚くくらいに冷静になっている。

死を目前にしたらこうも図太い神経になれるのだろうか。

竜の口の中にはいり、口が閉じる。

次の瞬間、二人の体が光り始めた。

バシッと音がした瞬間、二人は竜から解放された。

竜は頭を吹き飛ばされ、力なく空間の底へ堕ちて行く。

「うわっ・・・死ん・・・でない？」

「何？これ・・・」

——危ないところだった。

「誰だ？」

——私は誰でもない。人でもあり、天使でもあり、悪魔でもある。

「意味わかんない。」

——分からなくていい。それはどうでもいいこと。

「助けてくれたのか？それとも自分が俺達を殺したいのか？」

——助けた。そしてあなた達をここから解放する。

二人の正面に小さな扉が現れる。

——でも、元の世界ではない。私には別世界へのゲートしか開けない。

「ゲート？」

——私が近くにいられる時間は少ない。後は自分達で解決して。

扉が開き、外の景色が見える。

二人は其処へ吸いこまれ、消えた。

唐突な旅立ち No. 6 (後書き)

うーん・・・読んでくれた方、感謝です。
何とか切のいいところまで来ました。
でも文章はOTZ

三 未知の世界 No. 1

意識が戻ると二人は森の中、木の根元に転がっていた。

海斗が起き上がろうとすると、何かがのしかかり、身動きが取れない。

「あ？」

のしかかっているものを確認すると、少し頬が赤くなった。

美由だった。

海斗は慌ててどかす。

その拍子に美由は目を覚ました。

「ん……？」

美由は辺りを見回した後、海斗に向き、平凡でポピュラーな問いを出した。

「ここどこ？」

海斗は最も簡潔な答えで受け答える。

「森」

それが今の現状で説明できる限界。

「見れば分かるけど……」

美由は呆れた、という風に木にもたれかかる。

その時、その木が震え、くねくねと動き出す。

「こらっ！ その女！ 私に気安くもたれるでない！ 樹皮がはがれるだろう！」

一番驚いたのは美由だろうが、海斗自身も心臓が軽く1時間止まるくらい驚いた。

「うっわ！？」

美由は飛び上がり（比喻ではなく、本当に飛び上がった。）転がるように離れた。

「痛い痛い！ 離れるときは静かに！ ああ……樹皮がまたはがれた……」

木は現在進行形で叫び続ける。

現実こんな木は存在しないとは思う。

世界中探したらあるかもしれないが。

海斗は夢であるか確かめるために自分の頬をつねる。

その様子を見た(?) 木は枝を海斗の頭に振り下ろす。

「いてえっ!」

「夢じゃないぞ! 少なくとも渡しはそう思っている!」

この木は木が利くのか利かないのか分からない。

とにかく人を驚かせるのは得意なようだ。

「おっと、魔道騎士団のお通りだ。そこの二人、私の根元でもいいから道をあけなさい、おおそうだ、なるべく根っこを蹴ったりしないようにな・・・そうだ。」

二人は何がなんだか分からずにも、木の根元に寄る。

しばらくすると複数の人間が地面を踏みしめる音が聞こえる。

「なに?」

美由が小声で海斗にささやく。

「しらねえよ。この辺詳しくないしってかここ現実か?」

そうしている内に魔道騎士団とやらが姿を現す。

まず目を引くのは眩しいくらい美しい装飾の服装。

先頭の人間は羽が生えたような鎧のような物を着ている。大将の目印にも思える。

その後ろを歩く兵士のような人間は鎧全てが白をベースに作られている。

先頭の人間は二人の前で立ち止まり、その後ろの人間は同時に立ち止まる。

「トレントよ、先ほどおぬしの叫び声が聞こえたのだが、何があったのだ?」

「騎士団団長様、大した事ではありません。ただこの二人が私めの樹皮を少々はがしただけで・・・」

「そして久しぶりに人間と話す機会が出来たから嬉しくて仕方が無

かったと?」

「はい、まことに恐縮ながら・・・」

そのトレント、と呼ばれた木はかなりへりくだった様子で話している。

「ふむ、その二人、あー・・・なんと呼べばいいかな? まあ後で聞きましょう。トレントが脅かしてしまった様で申し訳ない。ただ悪気は無かったんだ、少しうるさいだけで。早速聞きたいのだが、この世界の何処の国から来たのかな? それとも向うの世界から? あ、向うの世界とは・・・どう言おうか・・・まあ君たちがこのことを知らなかったらその世界から来たのだろうが、その服装から察しは付くがな、まあ念のための確認だ」

その騎士団長とやらはグダグダと長文をまくし立てるのが好きらしい。

海斗はぽかんと口を開けている。

美由はその顎を下からはたき、顎をしめた。(そして海斗は舌を噛む羽目になった。)

「えーと、向うの世界から、の答えでいいんですよね? 騎士・・・団長さん?」

「正確には魔道騎士団団長だが・・・向うの世界からか。そうか、またあいつ等か」

「あいつ等ってローブの男達のこと?」

「特徴的にはそうだ。組織名を言うならば『ゲーター』というが『ゲーター?』」

美由はほとんど状況を飲み込めていない海斗を横目で見ながら再び質問する。

「話すのも疲れてきたから、簡潔に言わしてもらおう。ゲーターとはこの世界・・・あえて言うならば異世界、だが。その異世界から君たちの住む世界、現世といっておこうか、現世への通路を作り、行き来するものたちの組織だ。それだけなら害は無いが、やつらは現世の『危険区域』と指定される・・・何を基準にされているかは分

からないが・・・場所を破壊する、消滅だな、消滅させているんだ。だが、その破壊行動の中で数少ない生き残ったものたちは奴等の通路に入り込んでしまつて・・・その後は君たちの直面している場面と同じだ」

「うん・・・あんまわかんない・・・」

美由は頭がずきずきするのをこらえながら言った。

「分からなくていいさ、最後に言いたいことは、我々はその『被害者』を保護し、生活を援助する役目を持っているということだ」

「ふうん・・・っえ!？」

「ということで君たちを連れて行くわけだが、ああ・・・勘違いしないでくれよ? 君たちを捕らえて指を一本一本切りながら現世について探りだそうなどとは考えていないから」

三 未知の世界 No. 1 (後書き)

やっと節目？を越えました・・・w

何か無理矢理話を持ってきちゃったような感じになったっぽいですがOTZ

未知の世界 No. 2

移動中、海斗は黙り込んだまま物事を整理しようと試み、美由は周りの景色を眺めながら時々質問をする。

「あの、魔道騎士団団長さん？」

「・・・その呼び方も疲れただろ。ルシフェルでいいよ、ルシアとも呼ばれるが、こっちは気に入らない。で、質問か？」

「はい、魔道ってことは・・・こう・・・変わったことが出来たり？」

「変わったこと・・・とは・・・魔法の事か？」

「はい、そうです」

「説明は難しいから魔法を体験してもらおうか」

そういつて魔道騎士団団長、ルシフェルは美由の眉間に指を当てる。

「ディライ。」

そう呟き、指を下ろす。

「これで動けなくなる」

ルシフェルは少し微笑んだ。

「え・・・あ・・・あれ？」

美由は体を動かそうと必死にもがくが、ぴくりとも動かない。

海斗は口をぽかんと開けてその光景を見ている。

ルシフェルはもう一度、美由の眉間に指を当てる。

「これで動ける」

「あっ」

美由の体は何事も無かったかのように滑らかに動く。

「さあ、魔法の説明は終わった。都までもう少しだぞ」

そういつてルシフェルは歩き出す。

後ろに付く兵士は人形のように足を揃え、歩き出す。

「美由」

「うん？」

「大変なところに来ちまったな・・・」

「そうだね」

海斗は額に冷や汗をかいている。

「あつたことを全て、話すんだぞ」

リュウゼンが念を押す。

「わかってるよ」

サムシールがうんざりしたように言う。

扉を開ける。

中は教会のような造り。

だがステンドグラス、机、椅子が無い。

一番奥に椅子があり、其処に誰かが座っている。

リュウゼンが足を踏み入れる。

——ザンツ

天井から複数の人影が降り立ち、整列する。

「さあ」

椅子に座る人物が促す。

「はい、順を追って説明いたします」

「いや、大体は分かっている。危険人物がいたんだろ？そのことについて」

「はい、分かりました。始末はしましたが」

リュウゼンが話し始める。

未知の世界 No. 2 (後書き)

かなり改正しました・・・つもりです。

心優しい方のご指摘が無ければ下の下小説になるところでした

(今もそうですが・・・)

一応、無い頭で頑張ってみました。変なところがあればズバズバグシャグシャ指摘しちゃってください。

御見苦しいものをお見せしたこと、お詫びいたします。

そして、御指摘くださった方、感謝です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8998a/>

ゲート

2010年11月13日03時18分発行